

特集 第7回『言語力』大賞コンテスト

第7回弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト 受賞者一覧

I : 文学作品部門 (ジャンルは自由)		*応募総数 22点	
大賞	人文学部3年	西谷 早織	「匂わぬ金木犀」
優秀賞	農学生命科学部1年	川田 健登	「虹のみえる町」
〃	人文学部2年	岡部 麻由	「わすれんぼうさん」
〃	農学生命科学部2年	名取 史晃	「好き・嫌い」
佳作	教育学部4年	前田 泰裕	「真か相(うそ)か」
II : 評論部門 (テーマ「東日本大震災」)		*応募総数 2点	
優秀賞	教育学部4年	佐藤 雄哉	「[拡散希望]が広げたもの」

★受賞作品公開★<http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/>

大賞受賞者の声

小説を書く

第7回言語力大賞 大賞受賞 人文学部3年 西谷 早織

『言語力』大賞コンテストのことを知ったのは、偶然でした。確か、OPAC を利用しようと、附属図書館のホームページへアクセスした時のことだったと思います。コンテストの名前だけなら聞いたことがあったのですが、どういったものかまでは把握していませんでした。それで気になって調べてみた、というのが大体の経緯です。そういう訳で、大学も三年を過ぎた今になって、私はようやくこのコンテストに挑戦する機会を手に入れることが出来ました。コンテストには文学作品部門とテーマ部門がありましたが、小説というものは書いたことが無いし、物語を考えてみるのが楽しそうに思われて文学作品部門の方を選ばせていただきました。ところで、小説を書く機会というのは人生の中でそう多くはないのではないかと、今の歳になって思います。小学校、中学校、高校の国語の授業を通して、詩や短歌、俳句、作文を書くことはあっても、小説を書くことはなかったと思

います。それは決して、私だけではないでしょう。小説という形で物語をつくっていくことは、考えてみればとても自由で、そう言った意味で子どもの得意そうなことのように感じられます。だから余計に、成人した今になって小説を書いたことが不思議に思われるのです。実際、小説を書いているときには、文章を作っているという感覚よりは、空想をしている感覚の方が強かったように思います。頭の中のスクリーンに像を浮かべる、という表現をよく耳にしますが、まさにそのスクリーンに絵を描いているような、もしくは映画を撮って映しているような、とにかく映像に比重が大きく傾いた作業でした。そして、頭の中に浮かび上がっているその場面に適し、尚且つ自分が読んで最もしっくりくる音の言葉を当てはめていくことを続け、今回の小説は完成しました。思い返せば、国語よりも美術や音楽に近い気がします。

大学生活の中で出来るだけたくさんの方に挑

戦すること、たくさんを経験することが、入学した時からの私の目標でした。その挑戦の一つがこうして実を結んだことを大変嬉しく感じています。今この文章を偶然読んで下さっている誰かが、来年の『言語力』大賞コンテストに応募す

るのかもしれませんが。そんな風に偶然が繋がっていくのなら、それこそ小説みたいだと、今からわくわくしています。いつか一冊の本になるくらい、末永くこのコンテストが続いていくことを願っています。

(にしや さおり)

審査委員から

読者にやさしい文章を

第7回言語力大賞審査委員 人文学部教授 奥野 浩子

今回、久しぶりに「言語力」大賞の審査員を引き受けました。過去数回の審査員経験でも感じましたが、優劣・順位をつけるという作業は「苦しさ」を伴うものでした。それでも、一定の基準で選考しました。「読者にやさしいか」という基準で読んでみました。テーマが一貫しているか、場面設定に無理はないか、行間に含みを持たせる書き方か、情景に人物の気持ちを代弁させているか、などなど。読み手にやさしい文章は、音楽が聞こえてくるようで一気に読むことができ、読んだ後に一定の物語世界が残るものでした。

最近、授業で学生が答える日本語がよくわからないことが増えてきました。特に、英語の授業で英語を日本語にしてもらおうと不思議なことがよく

あります。「自分でもわからない」日本語を言う学生がいます。「英語で」表わされていることを「日本語で」表わすことが求められているのに、英単語を日本語に置き換えて日本語らしき順序にして終わりのようです。これでは「わかった」ことにはなりません。自分でもわからないことは他人にもわかりません。

「言語力」大賞に応募することを考えている学生には、自分が思い描く作品世界を「適切な」日本語で表わすことができているかを吟味してから応募することを薦めます。タイトルも作品の一部であることを忘れないでください。今後も審査員を悩ますような力作を期待しています。

(おくの こうこ)

審査員の体験と苦渋の選択

第7回言語力大賞審査委員 保健学研究科准教授 稲葉 孝志

書斎の本棚には雑多な書籍が積まれているが、一編ほども玩読したものはない。文学とは縁遠い私が「言語力」大賞コンテストの審査員として連座しようとはゆめゆめ考えもしなかった。

文学作品部門22編、テーマ部門2編の応募がありました。何れの作品も構成・表現力豊かで、評価に値する箇所が随所に見られ、凡作とは言い難く優劣付け難いものでした。現今の大学生の中にヒトとヒトとの意思の疎通を願う言葉（文字文化）に魅力を感じ、感性を磨いている若者が居る

ことに安堵しました。その中で特に読後感や現代社会人の精神的内面を映し出す感性が行間に滲み出ている作品に惹かれ苦渋の評価基準と致しましたが、読者によっては千種万様と考えます。難を申せばコンテストの審査には文字文化に精通される審査員複数の選定を望みます。このことは応募学生の益々の「言語力」コンテストへの志気を高邁するかも知れません。さらには、可能であるならば他大学との交流装置を先導されたらとも考えます。いずれにしても弘前大学の図書館において

文字文化を育む本企画は継続すべきと思いますし、ますますの発展を望みます。

(いなば たかし)

「言語力」大賞コンテスト審査委員を務めて

第7回言語力大賞審査委員 理工学研究科教授 渡辺 孝夫



普段は小説の類をほとんど読まない私ですが、今回「言語力」大賞コンテストの審査委員を務めました。ほんとうに務まるか不安でしたが、今は無事終えてほっとしています。

いざ作品を読み始めますと、物語の以外な展開に感心したり、登場人物の気持ちはどんなだろうと考えたりして、とても楽しめました。弘大生の「言語力」はレベルが高いと思います。今年は、惜しくも入選にはならなかった作品にも、個人的にはなかなか素晴らしいと思えるものが多数ありました。みなさん、来年も是非挑戦して欲しいと思います。

一方で、やはり評論部門の応募が少ないのが課題です。学生さんの立場としては、「評論」と言わ

れると何か堅苦しい感じがしてしまうのかもしれませんが。あるいは、何を書いたら良いのかきっかけがつかめないのかもしれませんが。思い切って文学作品部門を小説のみにして、その他のジャンル（評論、随想、詩、ノンフィクションなど）をまとめて自由作品部門にするのはいかがでしょうか。あるいは応募のポスターで、「評論」にはこんなことを書いて下さいと簡単な説明を加えると良いかもしれません。

それにしましても、この「言語力」大賞コンテストはとても良い企画だと思います。作品を読みながら、一所懸命に書いている学生さん達の姿が思い浮かびました。今後の益々の発展を祈念しています。

(わたなべ たかお)

特集 新たに指定された貴重資料

「秋田阿仁鉱山関係絵図について」

附属図書館長 長谷川 成一



このたび、附属図書館所蔵の「秋田阿仁鉱山関係絵図」が、新たに貴重資料に指定されました。同絵図は、5点（絵図は、^{しき}鋪と数えます）の各図から成り立っています。

本学では、昭和40年(1965)、旧文理学部改組の際に、交付された機関研究の経費によって多くの書籍・資料が購入されましたが、当該の絵図類は、その一環として購入されたものです。平成17年(2005)以降、大学院地域社会研究科の長谷川ゼミで当該絵図類の調査が実施され、年代が不明な資料に関しても研究が進み、ここに貴重資料として指定するに至りました。

各絵図の内容については、以下の通りです。

①阿仁鉱山二ノ又山鋪図 1鋪 紙本著色 文久3年(1863)

阿仁二ノ又鉱山の山支配人伊藤真楽が秋田藩山役人の杉原源之助へ進上した同山絵図であり、坑道図でもあり、^{おおたて}大楯・^ひ砒などと称される銅鉛^{ひどおし}の砒通（鉱脈の分布状況）が朱線で描かれて、嘉永6年如月（1853年2月）に鉱山改めを行った際に作成され、文久3年に藩へ進上されたと推定されます。

②阿仁銀山町絵図 1鋪 藩政時代 紙本著色 阿仁銀山町の絵図。図中に「銀山上新町」「銀山下新町」「畠町」「寺」「愛宕社」「山神社」「行人」「神明社」等の記入が見え、藩政時代阿仁鉱